
隘路

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隘路

【Nコード】

N8608Q

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

いつかの時代。地上は滅び、人々は地下にもぐり生活を繰り広げるようになった。と言っても、安定した地上生活ではなく、いつ戦争になるかもわからない不安定な生活が続いていた。兵士達のトップ階級と副リーダーである女性を主人公として進めていくが、若くして彼女は何故ここにいいのか、世界はどうしてこうなってしまったのかを描いていく。（予定）

ちなみに、更新は、かなり不定期になると思います。ご了承ください。

遺失

崩れた壁は今日もそこに存在した。

この世界は悪疫がはびこってしまったかのように静まり返っている。赤い月が地平線に消えようとしたときに、私は身震いをした。

……また、始まるのだ。

地獄絵のような現実が。

「……交代。」

いきなり背後に現れた人影に反射的に銃を向けてからおもむろに下へ下げた。

「左京……。」

後ろに立たれると仲間でも銃口を向けてしまうようになった。

もはやこれは、悪風に近く、いまさら私がどこまでできるものではなくなくなってしまった。

「……はじまるな。また、長いんだか、短いんだか……よくわからない一日が……。」

左京は、何も言わずに私の隣に胡坐をかいて座った。

どうやら無駄口はいいからはやく休めという左京なりの気づかいらしいのだが、こいつはあまり動かないうえに、めったに話さない、そのくせやることはやり、スピードもあるという完璧な男なので、悪辣としていて仲間内でもあまり好かれていたような性格ではないうえにわかりづらい。

「……石仏……。」

「……ライフル。」

私の呟いたことは無視し、こちらが肩からかけていたライフルを要求してきた。

「……ほらよ、違背だけはするなよ？」

私が言ったブラックジョークも全く反応せずにライフルと弾丸を受け取ると、その場に根でもはえたかのように動かなくなった。

左京に背を向けながら私はふと過去を思い出した。

……かつて、違背をしたものが何人かいた。

彼らが言うに、いつまで地下に潜って私達地上兵や地上兵のリーダーに畏服していなければいけないのかと言うことだった。

当時の彼らは若かった。

彼らのような若者が、よい方向へと世界を導いてくれたならば、地上は、未だに活気溢れる人々の住みかだったのかもしれない。

いや、そんなことはやはり無理だっただろう。

気持ちや情熱だけで事が動いてしまうのなら、今、こんな状況になどなりはしなかった。

だからこそ、世界はおかしな方向へと道を辿ったのだ。

彼らと歳の近かった私も彼らの考えに賛同できないことはなかった。

『いつまで地下に隠れていりゃいいんだよ!?!』

『地上兵は何してるの!?!』

『地上では本当になにも作物が育たないの!?! やってみなきゃわからないじゃない!?!』

『和解はできないというのか? やったことはあるのかよ! 殺しあうんじゃないくて、ここはみんなで協力すべきところじゃないのかよ!?!』

彼らのその情熱が周りに感染し、熱が高まった。

今思えば、いつからだったのだろう。

彼らのようなあの感情を忘れたのは。

話が少々脱線したので戻そう。

私達では押さえきることができずに……否、あまり押さえずに、彼らは私達地上兵の武器を手にとり、私達を脅すと、自分達だけで外へと旅立っていった。

三日後、見回り地上兵の無線LANで連絡が来て知ったのだが、彼らは死んでいたそうだ。
詳しいことは知らない。

知りたいとさえ思わない。

結果さえあれば、それがすべてなのだ。

ろくな戦闘訓練や耐性訓練を受けていない人間がいきなり地上に武器を持って出ていったからってどうこうなるってもんじゃない。

だから、私はその結果を持って地下の人々を地上に出ないように制圧したのだ。

今、世界は、地下に埋まっている。

人は時折、私達地上兵に囲まれながら15分だけ太陽の光を浴びることが許される。

それ以外はひたすら地下に潜り、太陽とは似ても似つかない白熱灯と、蛍光灯の下で電気に囲まれながら生きている。

武器を作るために電気供給が欠かせなくなった地下は絶え間なく電気が流れ、地下はかなりの科学発展を独自に作り上げていた。

もともと地上に人が住んでいたときからかなり地下発展が進み、科学水準も高かった国だ。

私達が住むのになんら苦労はしない。

人々はそれぞれ地上で使っていたものを地下に非難させてそのまま使っていたりする。

「お帰りなさい、瓜生副リーダー。」地上兵と地下を見張っている境界線に立つ者……境界兵（簡単に言ってしまうえば見張り役にすぎないが）の小柄な女の子が私を笑顔で出迎えてくれた。

「ああ、私の名前が雨竜じゃなくてよかったよ。竜じゃ本当に男だ。」

「え？」

「いや、何でもない。私はこれからしばらく寝るとするよ。見張り、ご苦労様。」

「はい！お疲れさまです、瓜生副リーダー！」
ぴよこんと跳ねるように敬礼した彼女の姿はなんとも可愛らしかった。

大体境界兵にはまだ少女とも呼べる女がつく。

それは、瞬発力、身軽さ、ちょっとした所に隠れられる小ささを身につけているからであり、決して実際の戦闘に女の筋力では足りないからではない。

現に私は女であるが副リーダーの座をこの手にしている。

長い廊下を渡ると私は戦闘服に身を包んだままベッドへ横たわった。下級兵であれば敷き布団を何枚も敷き詰めた場所だっただろうが、私はそうではないのでそのまま瞳を閉じた。

……これももはや悪風と言えるだろう。

水は節約するために風呂は銭湯のような風呂釜に一週間に一回湯がはられ、服は戦闘服が三着それぞれに配られ、着替えるのは三日に一度、洗濯一週間に一回、それも風呂釜の残り湯を利用したものとなっている。

残飯はほとんど出ないが、それでも食べれないところというのは存在する。

そういったものは地下の畑にまかれ、足りない栄養素は全て濃縮された栄養剤で取る。

もちろん、水で飲み込むのではなく、錠剤を丸呑み、あるいは噛み砕いて食べるのだ。

「……ん。」

久々に誰にも起こされず、緊急連絡もなく起きると、私は激しい空腹に見舞われた。

「……腹、減ったな……。」

適当に置いてあった栄養剤の瓶を引っ掴むと、何つぶか取出し、噛み砕いた。

だが、こんなもので腹が膨れるわけもなく、空腹だと訴える腹はキリキリと痛みだした。

全く、情けない。

外傷は無視できても腹の痛さは無視できないと言っのか。

仕方なくフロアの食堂へ向かうと、そこにはA04兵士の里崎さとしがい

た。

「……副リーダー……。」

里崎は、ペコリと座ったままこちらに頭を下げると、瓜生から、別の方向を向いてしまった。

「里崎……おまえもか。今日は中々平和らしい。」

「平和……？馬鹿言ってはいけませんよ……副リーダー……ここに平和なんて、存在しない。」

何を考えているのか、よくわからない男だ。

正直、左京よりもわからない。

ちなみに左京は、A06だ。

A級兵士はリーダー、瓜生、里崎、左京を含めた17人しかいない。そんなとき、リーダーがひょっこり顔を見せた。

「おや、瓜生に里崎じゃないか。ちょうどいいや、君たちに頼んでもいいかな？」

「加藤リーダー……。」

瓜生が頭を下げると、里崎も少しだけ頭を下げた。

「まあ、そんなめんどくさい事じゃないよ。ちよつと見回りしてきてほしいんだ。リーダー達がちゃんと仕事をしてるか、取り締まれているか……。ね。」

「十分、めんどくさいですよ……リーダー……。」

「……構いませんが、リーダーは何をしていらっしゃるのですか？」
瓜生と里崎の声はほぼ同時とも言えただろう。

「あはは。瓜生はいい子なのに里崎は悪い子だね。僕はちよつとしたヤボ用があつてね。これからB級リーダーとデートってとこかな。」

「……男同士ですか。」

「そうそう、相手が瓜生だったら僕も嬉しいんだけどね。」

ニコリと加藤は笑って白い目を向けたままの瓜生を見た。

「それは、私に対する汚辱でしょうか？」

「やだなあ、僕は本当に瓜生だったら堂々とデートだって言えると

思っただけだよ。君を辱めるつもりなんてこれっぽっちもないよ？」

……加藤はいつでもそんなのだ。

嘘はつかないが、不必要と判断した情報や、必要以上、または極秘任務などの情報は、仲間内にも一切話さずのりくらりと逃げるのだ。

笑っていても、裏の顔が知れないのが加藤だ。

おどける分、里崎よりも厄介者でもあるだろう。

「里崎、私も不本意だが、飯を食ったら、すぐに任務に取り掛かるぞ。」

「ええ……めんどくさいですよ……。」

「じゃ、頼んだよー？」

パタパタと手を振り、だれた里崎を残して加藤は去っていった。

「めんどくさいじゃない。飯食う時間があるだけマシと思え。お前、そんなんでよくA04を背負ってられるな。」

呆れながら瓜生が言うと、加藤はだれたまま、「瓜生副リーダーが雄々しいんですよ……。」と言った。

「……誉め言葉と取っておく。」

「ええ、そうしてください……。」

ご飯を済ませると、不本意とは言うものの二人はきちんと任務をこなし、情報をまとめ、加藤に手渡した。

「ん。お疲れさま。よく頑張ったね。二人とも。」

ニコリと加藤が笑い、二人の頭に手を乗せるので、瓜生は、「お戯れを。私達はそのような事をされて喜ぶ年齢ではありませんよ。」と言い放った。

里崎は、「疲れましたー……寝ます。」などという始末。

そんな二人を見て、加藤は、「んー？年齢とか関係ないよ。これは僕なりのスキンシップ。瓜生は硬すぎるよ。スキンシップに年齢は関係ないだろ？」と笑った。

「……ここは戦場です。馴れ合いをする場所ではありません。何より、ここの軍全体を率いているのはリーダーなのですよ？そのよ

うな調子で何を取り締まれると言うのですか。」

「戦場より何より、ここにいる人たちは家族だろ？君にもわかるはずだ。ここA級にいる人間はだいたい幼い頃に両親から手放されている。両親が亡くなった人もいるね。中には売られた人もいるらしいけど。家にいるうちは警戒をといっていたいよ。家族の前なら尚更だ。攻め入られた時と、裏切られた時以外は今のままでいいよ。」

瓜生は顔を反らすと、「……よく言う、誰にも何も打ち明けず、心も開かない。誰も信じていないくせに……。」と小さく吐き捨てた。「瓜生？心を開かないっていうのだけは聞き取れたよ？僕は僕なりに心を開いてるんだよ。君らに。だから伸ばした両手には武器を持つてないだろ？それでも僕がわからないというなら、それは、瓜生がわかりやすすぎるんだ。」

「そうですか。任務は完了しましたので、これにて私は失礼させていただきます。」

瓜生は、部屋に帰ると、再び眠りについた。

次に目覚めたときには無線LANのノイズ音で起こされた形となった。

「A02、UMO（トのム、ユーエムオー）応答せよ。こちらA06、SKT（トのム、エスケーティー）。」

相変わらず偉そうな口調で無線を入れてくる左京に、かすかに苦笑をもらすと、瓜生は、すぐに無線LANを握り、「こちらA02、UMO。どうした？」と答えた。

「敵が来る予感。備えて今日の見張りは俺とお前だ。」

ノイズ交じりのその音は、声からでも鉄面皮が容易に想像がつくだろう。

それほどまでに声に抑揚がないのだ。

瓜生は一言、「了解。」と言って無線を切った。

以遠

いつもの場所に行くと、左京は大きな図体を狭そうに物影へと押しやっていた。

「いつも早いんだな。左京。」

「……お前が遅い。」

「いや、お前が早いんだ。しかし、夜になると何故だいたい私や左京が地上見回りになるんだろうな。実力があるのはわかるが……うむ。」

左京は、考え込む瓜生にライフルを差出し、物影へ座るように手招きした。

瓜生は、ライフルを受け取ると、左京より何回りか小さい体をくぼみとも言える狭い場所に押し込めた。

左京が空を指差した時点で瓜生は左京が何を伝えたいかがわかり、頷いた。

どうやらヘリがかなりの広範囲を旋回しているらしい。

こちらの住みかをあぶりだすためだろう。

こちらにかなり近づいてきた。

下手に攻撃すれば場所がばれる。

このまま何事もなく通り過ぎてくれればいいが……。

幾度となく同じような状況に置かれてきたが、いつまでたっても、この見つかるか見つからないかの瀬戸際の戦闘は慣れない。

うつすらと手が汗ばみ、できるだけ身動きをしないように全身に力を入れた。

どうやらこの戦闘に慣れないのは瓜生だけではないらしく、心なしか左京の息遣いも浅くなっているように聞こえる。

「意馬心猿……。」

瓜生がそうつぶやくと、左京は、何も答えずに数回深呼吸をした。

瓜生もまた、一息を吐き出すと、頭を回転させはじめた。

相手のヘリにどのようにして探知機をつけるか、また、この地域を知られないようにするにはどうすればいいか……ヘリが一番近づくとしたらそれは、あの頑丈な時計台くらいしかもう高い建物はなく、建物と呼べるものもなかった。

今は遠くに見えてはいるが、どのようににしてあそこまでたどり着くかもわからない。

ヘリもまた、巧妙な高さで飛行している。

手だけで持てるような銃では攻撃できない高さを保ち続けているのだ。

しかしあのヘリ……ずいぶんと広範囲を飛び回っている。

現在、瓜生にはヘリが胡麻粒程にしか見えないほどヘリは遠くに行っている。

「……この情報か、何かの電波が漏れたわけではないのか……？」
左京はうんともすんとも言わずにいた。

「左京、相手は、サーモグラフィーを持っていたかどうか、わかるか？ 場合によってはここは見つかる……手分けをする必要があるかもしれない。その際無線は禁止。相手に音が拾われたらこちらはこの夜空に曳光弾えいこうだんを使ったも同然となってしまうからな。だが相手が持つていないなら……できるだけ身動きせずにやり過ごすぞ。こちらは敵基地をみすみす見逃す事になるが、食糧も土地も、水もなんとか足りている。急いで泥沼に足を突っ込む必要もあるまい。」

「……遺脱。」

「遺脱？ ああ、手分けしたさいの集合場所を言っていなかったな。」

それはあの時計台タデモノだ。あそこの屋上で探知機こいつを張り付けてやる。だからいいな。見つかったもできるだけ攻撃するな？ むしろ引き付けて探知機を張りつけてやれ！」

左京は何も言わずに黙り込んでいた。

「……お前は本当に……無線の方がよくしゃべる。なあ、A06、SKT？」

するといつも鉄面皮でムスリとしたような顔つきがさらにムスリと

したのを見て、瓜生は、「冗談だ。わかってるよ。任務内容の最低限を伝えてるからいつもより言葉数が増えてるだけだってな。しかし、お前がそんな表情を見せるとはね……。」と言って静に笑った。「……無駄話はいい……そろそろ旋回してくるぞ。」

「わかつている。こちらとてただ無駄話をしていたわけではないぞ。大体お前があまりにも石仏だから悪いんだ。」

左京は何も言わずに先ほどより早いスピードで旋回してくるへりに目を凝らした。

ずば抜けて視力のよい左京は、双眼鏡など普段あまり使わない。

「……おい……何故旋回スピードが早い？こちらを炙り出すならゆつくり回ってくるはずだろう。まさか奴ら、引き上げる気か？あるいは……冷えてきてこちらの位置がわかったか？」

「……手榴弾……。」

「何だと？」

瓜生が冷や汗をかいたとき、近くに手榴弾が投下された。

爆発で地上兵が出てくるのを狙つての行動だろう。

「左京！目だけは守れ！お前に失明されてはこちらが困る！」

瓜生が全ていいおわるより先に手榴弾は爆発した。

手榴弾らしい小さな爆風と共に手榴弾だとは思えない程の音が空に響いた。

へりはそのまま遠い場所へと移動し、3つほど手榴弾を落としていった。

「A02、UMOあるいはA06、SKTこちらA01、KKS（トのイ、ケーケーエス）。爆音を感知した。敵に基地が見つかったか？現実報告せよ。」

瓜生と左京の無線が入り、瓜生は、無線をつかむと、「こちら、A02、UMO。敵には見つからない模様です。爆発はほぼ音だけ。我々の基地を見つけるために焦っていると思われる様子。A06、SKTも無事です。応援要請はありません。敵に無線を拾われ兼ねないので無線禁止令と境界兵の強化、地下10階までのフロア

を緊急モードに切り替えてください。こちらは単独行動許可を願います。」と一息に言い切った。

「了解、許可する。」

それきり無線は切れたので、瓜生は電源を切り、左京も電源を切った。

「さあ、単独行動許可が出た。奴らはこれで燃料がほぼ底をつくまでこちらを見つけようとするだろう。左京、後程あの時計台で合流しよう。」

「了解。」

瓜生は眉をしかめて耳を叩いた。

「しまった……爆音で耳を少しばかりおかしくしたらしい。とりあえず、死ぬなよ。左京。」

左京は何も言わずに走っていった。

ヘリが遠くに行っている今ならできるだけたくさん動いても気づかれはしない。

瓜生も走りだし、時計台を目指した。

あの時計台は周りに比べとても頑丈だったらしく、今でも原型を止めている唯一のものだ。

もうずいぶんボロボロになり、もう一発核爆弾でも受ければ崩れるのだろうが、そんなことをする必要はなく、また、攻撃する必要もないのでそのまま放置去れ続けていた。

それがようやく役立つ時が来た。

なんとか時計台で左京と合流すると、時計台の階段を駆け上がり、飛ばすタイプの探知機をセットした。

「なあ、左京……地面からじゃ、わからなかったが……ヘリ、三台くらい飛んでるんだな。」

今やタテモノとも言える建物は、時計台だけなので低空飛行しているヘリが見えていた。

「四台……。」

左京がそう呟き、瓜生は苦笑した。

「お前は本当に目がいいな。私も悪いほうではなかったはずなのに…… おまえには適わん。」

左京はじつと何か考えているかのように瓜生を見てから、空を仰ぎ、「来る。」と呟いた。

「……これでは、こちらの大まかな位置は知られてしまう。予定変更だ。左京。あっちの地域に飛んでいるへりに探知機をつけるぞ。相当遠いが……走って向こうが帰る前までに間に合うか……？」

「俺だけなら。」

瓜生が考え込むより前に左京が頷いた。

「……お前は……本当に態度も背もでかいな。本当に私より年下で私より下っぱの兵士か？」

「背は関係ない……。」

そんなことはどうでもいいから早く探知機を渡せ、と言うように左京はぶっきらぼうに手を瓜生の方へと延ばした。

「はいはい、わかりましたよ。じゃあ頼んだぞ。探知機をつけたらすぐ帰ってこい。私は最初の場所で引き続き見張りをしておく。敵がサーモグラフィーを持っていたとしても……全身を覆ってしまえば熱はもれない使用にはなっているからな。私の方は心配いらない。」

探知機を瓜生から受け取った左京は、さっさと走り去ってしまった。瓜生もその場を離れ、元の定位置へと戻った。

左京なら心配いらない。

そう思う反面で、あいつはいつか、ああした単独行動で戦闘中に死んでしまうのではないかと思う自分がいた。

何でもできてしまうからこそ、誰とも仲良くなろうとしないからこそ、あいつは戦闘中に命をおとしかけない。

まあ、死んだら死んだでそれきりだ。

実力不足。

その一言に尽きる。

それは、私も変わらない。

誰も信じるな。

常に様々な考えをもて。

最悪な展開も頭に入れておけ。

何が何でも生きてやるという意志をもて。

上に立つもの、敵や部下に動揺を見せてはならない。

拷問されようとも基地の場所は言っな。

犠牲はあるものだ。

毅然とした態度を取り続ける。

仲間が裏切る可能性を考慮し、自分の事はあまり話すな。

結果が全てだ。

私がまだ訓練生の時にたたき込まれた言葉が飛び交った。

わかってる。

わかってるのだ。

なのに加藤は私達A級兵を家族だという。

いや、あれもフリに過ぎないのかもしれない。

あの人はよく言えば外柔内剛なのだ。

私も振り回されないほうがいい。

今の私の任務は基地を守ること。

ただそれだけだ。

余計な事は頭から排除しろ。

瓜生はキツと前を睨むと、小走りに物影に隠れながら走り続けた。

ヘリはサーチライトをつけて周りを探っている。

これではまるで罪人が追われていてその追っ手から逃げているようだ。

おそらく思ったように行動を起こさないこちら側に苛立つて来ているのだろう。

どこを的にしているのかよくわからない弾丸が次々飛んできてはど

ここに行く。

……しかし、相手とて最悪の事態は頭に入れているはずだ。こんなに弾を無駄遣いしていいものだろうか？

一日で見つかる保証だってどこにもないだろう。

あるいは、もう何日も探しているのかもしれない。

この今まで地域に來なかつただけで。

弾にあたり、砕けたコンクリートの欠片が瓜生の顔面めがけて飛んできた。

一歩引いて直撃は免れたものの頬をかすり、擦つた場所から血が微かに滲み出た。

瓜生は頬に触れもせずに、こちらに來たことで敵に吉と出るかこちらに吉と出るかを冷静に考えていた。

おそらくあちらの地域のへりだけに探知機をつけることでこちらに害はなくあちらの地域に総攻撃がかかるはずだが……敵もそこまで馬鹿でなければあの時計台は打ち壊されるだろう。

人がいるとわかつた以上、建物の上から攻撃されさかねない。

そして最低でも二日間、こちらにも念のために攻撃が来るはずだ。

玉数が少なければ最悪一週間続くかもしれない。

その間、地下フロア5階までは完璧に停止しなければ、電波を拾われたり、サーモグラフィーで土地の温度が違つたとわかつては困る。

もつと最悪な場合、核が落とされるかもしれない。

そうなれば攻撃は一日で終わるだろうが、大地が汚染され、食べ物を作れなくなる。

だが、それはあり得ないだろう。

敵の当てずっぽうで夜も探し続けるような焦り用からすると、食糧が水不足に陥っているはずだ。

それなのにいちいち核で自分達の新しい住みかになるかも知れない

場所を汚染したりはしないだろう。

だとすると、やはり一週間が無難だろうか。

その間地上兵の見回りはやめさせ、敵の攻撃が止んできて、隣の地域も何事もなくなってきたならそこに今まで力をため込んでいた私達が攻め込む。

うまくいけば圧勝だろうが、下手をすれば返り討ちにあうかもしれない。

食糧は不足していても、武器は十分にある場所ならこちらは負けかねない。

さて……四方に飛ばしたヘリの一つに小型爆弾つき探知機がついていたと知ったら敵はどう動く……？

身動きせずに瓜生が考え込んでいると、流れ弾が瓜生の左腕あたりをかすっていった。

瓜生はくぼみに体を押し込めて縮こまった。

外傷の痛みは全て無視するように訓練されてきた瓜生にとっては傷はどうでもよく、それよりか左京が無事に探知機をつけたかを考えていた。

「……じきに夜が明ける……いい加減ヘリの燃料も切れるはずだ。

左京はうまくやったか……？」

瓜生はそうつぶやくと遠ざかっていくヘリを見つめた。

ヘリはついに見えなくなり、やがて朝焼けに空の色が変化し始めた。

左京はまだ戻ってくる様子を見せなかった。

左京は左京で探知機は無事に付け終えていた。

相手に見つかる瀬戸際で物陰に隠れ、難をしのいでいた。

敵は去り、任務完了の連絡を入れたいところだが、あいにくと流れ弾があたり、打ち抜かれてしまった無線LANは使い物になりそうにない。

仕方なく流れ弾が当たった足を引きずりながら帰る事となった。

早く帰らなければきつと瓜生が加藤に、左京は死んだと伝えるだろう。

きつと待つ時間も決めているはずだ。

無線LANごと打ち抜かれた足は見事に玉が足に食い込んでしまい、ナイフで自分の皮膚や肉を切り裂き弾を取ったものの、足は正常に歩こうとするとどこかしらに力が入らずに引きずった方が早いという結果に至った。

早く帰らなければ。

気ばかり焦るせいで先ほどから左京の額には嫌な汗が滲んでいる。必死に左京が戻った時にはもう瓜生が待っていると思われる時間を容易に越えていた。

冷温

これで敵からの攻撃に備え、出入口が封鎖されたら俺はもう……。
左京があきらめかけた時、微かに動く人影を見つけた。

左京は無言で銃を構え、その人影も「動くな！」と言って銃を構えた。

銃を構えた先にいたのは瓜生だった。

瓜生は「左京……無事だったんだな。」と言った。

「時間は過ぎている……お前は、ここで何をしている？」

「……そうだな。予想内の時間はすでに経過した。2時間も前に。
しかし、予感がしたのだ。左京がそんな簡単に殺されてくれるはずがないと。だから見張りをしていた。もし敵の第二波が来ても左京が戻らないようであれば出入口は封鎖する予定だった。それまでは私が見張りをしている事になったのだ。」

左京から見た瓜生はいつでもこんな突拍子もないことをする。

マニアルどおりに動く堅物女なのかと思えばA02の座から引きずり下ろされかねないこんななんの根拠もないような無責任ともとれる行動をする。

常々左京は思うのだ。

何と変な女なのだろう……と。

俺を待っていた？

A級副リーダーともあろう人物が？

そもそも俺に近寄ってくる兵士は瓜生こいつだけなのだ。

何を好き好んで来るかは知らないが、いつも一方的に話しては俺の反応を見て、笑ったりつまらなさそうにする。

この女……何がしたい？

もう地位は十分すぎるほど手に入れただろう。

俺と関わるメリットがどこにある？

あるいは一匹狼を手なずけた氣にでもなっているのか？

上司が部下を従えるように？

地位なんてクソ食らえ。

俺は実績があればそれだけでいい。

「左京……無線が壊れていたのはわかったが、お前の足が撃たれているのは想定外だぞ？」

左京は無視して歩き始めると、瓜生が左京を押し倒した。

いつもなら押されてもびくともしないが、片足をやられたぶん、今日ばかりはグラリと尻餅をつくように地面に倒れこんだ。

「いいか、左京。体の傷はいくらでも無視できる。でも細菌はそうじゃない。傷口が悪化してお前が使い物にならなくなるのはごめんだ。私は私なりの治療をさせてもらおう。」

「弾は……抜いた。」

「だろうな。」

瓜生は左京のズボンを切ると傷口に口を付けた。

チクリとした痛みと共に血が吸われ出ていく。

ブツと瓜生は血を口から吐き出すとそれを三回ほど繰り返し、胸ポケットから包帯と見られるロール状になっている布を取り出し、的確に巻きはじめた。

「おし。こんなもんだろう。ほら、肩貸せ。歩くの手伝ってやるよ。」

瓜生は口のまわりについた血を腕で適当に拭くと左手を左京に差し出した。

左京は渋ったが、無理やり瓜生に捕まれた手を振りほどくことはせずに黙って起き上がり、歩きだした。

左京は瓜生の横顔を盗み見た。

顔に傷が一筋ついている。

変わっている女だ。

部下より自分が劣っているというのを素直に認めたり、手懐けると言うよりは、同等に見られているような気さえしてくる。

人の傷の心配より、自分の傷から細菌が入る事を考えないのか？

「左京……任務はうまくいったんだろうな？」

「……………ああ。」

左京が答えると、満足そうに瓜生が頷き、無線を手に、「こちらA02、UMO。A01、KKS応答願います。」と言った。

無線からはすぐに「こちらA01、KKS。どうした？」とかえって来た。

「A06、SKTを発見。負傷しているもよう。出入口を開けてください。負傷者の応急手当をしましたが、念のため手当を願います。」

「了解。出入口の境界兵に開けておくよう言っておく。」

そのままノイズ混じりの加藤の声はプツリと途絶え、開いた出入口へと入っていった。

境界兵達は敬礼をして「お帰りなさい、瓜生副リーダー、左京さん」と二人を出迎えてくれたが、地下は五階まで電気が消えているので境界兵の表情まで窺い知る事はできなかった。

ただ、いつもより少し緊張したような堅い声が、これから来るであろう敵の襲撃を知らせていた。

瓜生は、そんな彼女達に「私と左京が戻ってきたから出入口を閉めたらすぐに自分の部屋に戻れ。ここは危ない。君達はよくやってくれた。襲撃からは私達もクーデターを起こさないように見張りをする。その時は頼んだぞ。」と告げた。

少女達は少しばかり嬉しそうに「はい！お疲れさまでした！」と答えると瓜生と左京を見送った。

瓜生は知らないが、瓜生は何故か同姓からも人気がある兵士である。その人気も左京には、なんとなくわかったような気がした。

男勝りで命令口調ながらもちゃんと相手を気遣っているらしい台詞が除くのだ。

左京は、器用な奴……とだけ思うと、自分の部屋に運び込まれ、瓜生によって自分の部屋のベッドの上に座らされた。

「よし。これでキチンとした手当ては受けられるはずだぞ。じゃあ私は自分の部屋に戻る。急用はないだろうが、あれば隣にでも伝えて無線で知らせろ。ああ、そうだ。無線再発注をしなくてはならないな。その旨も私が伝えておこう。」

そう言つて瓜生は左京の部屋を後にすると、すぐに加藤の部屋へと向かった。

ノックすると、加藤が「瓜生かな？」と言った。

「はい。お部屋におじゃましてもよろしいでしょうか？」

「いいけど、僕が狼になったら瓜生はどうするの？」

笑っている声を無視して瓜生は加藤の部屋へ入った。

「失礼します。ご心配なく。それでもA級兵副リーダーですし、リーダーがそのような事をするはずがありません。リーダーの座を引きずりおろされかねませんから。」

「……知らないはずないよね？いくらA級兵つて言つたつて男の力にはかなわないでしょ。情報は隠蔽だつてできる。」

さつと後ろに回られ、両手を後ろで捕まれた。

瓜生は同じずに、「その時は、相手の顔面に頭突きと、相手の股間を蹴りあげるように訓練されています。また、私が裸に違い状態でこの部屋を飛び出した場合、廊下に設置されたカメラの画像が動かぬ証拠となります。いくらA級兵リーダーであっても、管理された画像はリーダーというだけで、書き換えたり紛失させることはできません。そのビデオを捨てるのが許されえるのは今から30年ほ

ど先です。」と答えた。

加藤は、パツと手を離すと、瓜生は解放された。

「瓜生は、つまらないなあ。境界兵の子なら一瞬にして身を固めて動けなくなっちゃうのに……変だね。瓜生も境界兵……いや、C級兵で習った事を口にしたのに、C級兵で同じ事を習った境界兵は、身を固めちゃって動けなくなっちゃうなんて。」

クスクス笑う加藤を見ながら瓜生は淡々と告げた。

「現状報告をさせていただきます。地上で左京を確認、先ほど部屋へ送りました。負傷箇所、右脚。ポケットに無線LANを入れていた模様、無線LANは、脚とともに弾にあたり、故障したため新たな無線LANの発注許可を願います。相手のへりに探知機をつけましたので、探知機の追跡をお願いします。」

「……左京は、足を負傷したんだね？それは、敵に見つかったって言うことかな？」

「いいえ、そのような事は聞いておりません。見つかった場合、真っ先に報告が入るはずですから、私と同じく、流れ弾による負傷です。」

「わかった。新しい無線LANの発注は、僕の方でしておこう。でもね、君はあんまり異性の部屋に入らないほうがいい。A級兵ならまだ平気かもしれない。でも、下級兵になればなるほど君のことを恨んでいる奴は多くなるよ。」

全く笑わずに、加藤は瓜生を見据えた。

「……心得ています。」

瓜生は、それだけ言うつと、身を翻し、加藤の部屋を後にした。

冷温（後書き）

二ヶ月放置状態が続いていましたが、ちゃんと更新していく予定なので遅くても暖かく見守ってやってください。

内奥

わかっている。

私が女だから、男の力にはかなわないだろうと馬鹿なことを思い付く輩が存在することくらい、わかっているのだ。

瓜生は、そのまま部屋へは戻らずに、境界兵と合流した。

しかし、加藤は何故今さらこんなことを言いだしたのだろうか？

瓜生が何故境界兵にならずにA級兵まできたのかということを問いたかったのだろうか？

たいていは女の場合、C級兵までの訓練を積むと、必要とされている境界兵へ流れる。

C級までくれば、もう兵士としては、一人前、あるいは立派と言っても過言ではない。

それでも瓜生は境界兵には、ならなかった。

そのことを今さら問われる必要性も、覚えもない瓜生にとっては、加藤の言葉はだんだん嫌味としか受け取れなくなってきた。

しかし、加藤に嫌味を言われる覚えもない。

さらに頭がこんがらがるのを感じながら、頭を横に振った。

「あ、瓜生副リーダー！」

ピッと敬礼してみせた境界兵は、短い髪の毛をかすかに揺らしていた。

「……髪の毛……。」

「……瓜生、副リーダー……？」

境界兵に不思議そうに顔を見られた。

それも当然だろう。

瓜生は、境界兵の髪の毛に触れていたのだから。

ずつと手を下ろすと、瓜生は、謝った。

「……すまない。私はすっかり髪の毛を放っておいてしまつてな……君くらいに切ろうかと考えていたんだ。」

「……もったいないです！せつかく胸の当たりまで伸びてるんですよ？瓜生副リーダーは、それくらいの方がかつこいいです！」

あまりにもはつきりと言われたため、瓜生は、ふつと笑うと、「では、結ぶとするか。」と言って、後ろに一つ結びをした。

「……A級兵の皆さんって……美形揃いですよね。」

いきなり何を言うのかと思いきや、境界兵の目は大真面目。

瓜生は、それに少々面食らいながら、「そうか？」と聞いた。

境界兵は、「そうです。加藤リーダーは、美形なのに優しそうですし、瓜生副リーダーは、かつこいいですし、美人ですし……焔戸ほのとさん

は、なんか渋いというか、哀愁漂ってますし、里崎さんは、ミステリアスですし、永谷さんは、まだお会いしたことないんですけど……左京さんは、背が高いし、イケメンじゃないですか。それに、

まだ話を続けようとする境界兵に、瓜生は、「そうか、仲間をそんな風に見たことがなかったから知らなかった。それに、自分の容姿など気にしたことがなかったよ。」と告げて、話の腰を折った。

「ええっ！？気にしてないのにその美貌ですか！？A級兵の皆さん……！？」

やたらに表情が変わる子だ。

突拍子もない。

「おそらく、リーダーも八分の一は異国の血が交ざっているからそう見えるだけだろう。」

「瓜生副リーダーも八分の一なんですか？」

「いや、私は四分の一だ。私の母が二分の一だったのね。」

「ああ、それで……。」

境界兵は、何かを納得したらしい。

それから、思い出したように、「ごめんなさい、見回りですよね！私も見回りなので、道が別れるときに言ってください。」と言って歩き始めた。

それからすぐ、「……瓜生副リーダーは、好きな人とかいないんですか？」と切り出してきた。

でた……女子が好きな恋の話だ。こういうノリに瓜生はついていけない。

いつも適当に受け流していた。

だが、今回の境界兵はこちらをじっと見て引き下がろうとはしなさそうなので、瓜生はきっぱりと、「いないな。」と言ってかえした。「そうなんですか。私、てっきり左京さんが好きなかと……いつも見張りは左京さんと瓜生副リーダーが夜交代してますし。」

「地上は常に戦場だ。毒とも、敵とも戦っている。そんな場所でもこしまなことなんざ考えられない。ちよつとでも気を抜けば死ぬのだからな。だから、仲間をそういった目で見たことはないんだ。加藤リーダーなら、いろんな視点から物事を考えられる人だから、何か考えてるかもしれないが、私はそこまで器用ではないのでね。」

そこまでのいい終わると、境界兵は黙り込んでしまった。機嫌でも損ねただろうか？

「すまない。地上は確かに戦場だが、境界兵は戦場ではないと言っ
てはいない。さっきの言い方では、そう取られてもおかしくはなかつたかな。軽率だった。次からはもう少し慎重に言葉を選ぼう。」
瓜生が謝ると、境界兵は、微笑むと、「やだな、そんなこと思ってますんよ。ただ、同じ場所、同じ戦いでも、戦っているものがこんなに違うんだなあと思っただです。立っている場所は、地上か地下かの差しかないのに、地上に出るだけで、命に関わる危険度かなり上がってしまう……そんなところに瓜生副リーダーは、いるんですね。私の方こそこんな話持ち出してきて軽率でした。ごめんな

さい。瓜生副リーダーって近寄りがたいイメージがあつたので、実際はそうでもないってわかったら、なんか……嬉しくなっちゃって。

「

瓜生は、少しばかり首を傾げた。

近寄りがたいイメージというのは、地位からするとわからなくもない。

わからないのは、「そうでもないってわかったら、なんか……嬉しくなっちゃって。」という部分だ。

たつた今、数分話ただけにすぎない。

その数分の会話のどこにそんなイメージを打ち砕くような言葉が存在したのだろうか？

そんなことを考えていると、境界兵は、くるり、と瓜生を振り替えると、「瓜生副リーダー、道が別れました。どちらに行きますか？」と尋ねてきた。

「立ち位置から、私は左を行こう。君は右を見てきてくれ。終わったらここにまた戻ってくるでしょう。」

「はい！」

そんな調子で見回りが終わった。

何故か瓜生は疲れ切っていた。

普段ついていく必要もないような女の子らしい会話のノリについていけなかったせいもあるだろう。

……リーダーが、美形で優しそう……？

まあ、わからなくもないが、リーダーは内で何を考えているかわからない、常に気の抜けない人だ。

私が、美人、だと？

そんなこと、今まで言われた覚えもない。

焰戸は、人見知りだし、私より年上とあって私のことが癪らしい。

焰戸とは、これでホノトと読む。

なんとも変わっている名前だが、A級兵の、A03の称号を持つ人物だ。

コードは、A03、HNS。

もう一人いた、永谷は、まだ19歳で、人見知りと言うより引きこもりっぽい感じがする青年だ。

リーダーと仲が良く、知的。戦力としても申し分ないが、呼び出されたときくらいしか顔を見せないので瓜生もあまり永谷のことを知らない。

コードは、A06、NET。

余談だが、ここに兵士として置かれるのは、40〜50まで。

焰戸は、そろそろ一般人か、私たちより上の階級に行くのだろうか？当然、地上や地下の取り締まりをしたり、現場で戦っているのは私たちのような兵士だが、戦略を練ったり、政治まがいの事をしているのは、私たちより歳上の元兵士たちだ。

実力が足りなければ、私たちは年を取ると、平民になり、守っていた側から守られる側へ変わる。だが、いざとなれば戦う戦力ともなる。（兵士育成リーダーになることもある。例えば、D級兵〜N級兵までのリーダーは、A級〜C級に所属していた元兵士だったりするのだ。）

若い兵士は、まだ兵士というより生徒といった感じだが、まだ年齢が一桁の子供もいる。

だいたいそうだった子供がここA級兵におり、A級兵の平均年齢が若い理由となっている。

私も例外ではない。

ベッドの上に倒れこんだままそんなことを考えていたせいか、すぐに眠りについてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8608q/>

隘路

2011年11月13日10時24分発行